

力待

岡山の現場から

信頼関係築き寄り添う

夫?」などと尋ね、話を広げる。

支える会は二〇〇二年発足。炊き出しを毎週日曜夜、同市中心部で続け

申請や就職、病気の治療、家探しも手伝い、二〇〇二年で約二十人が野宿を抜け出た。

お茶を飲むより、自立にも時間がかかるんです」

を急ぐべきとの考えが支援者にもあるという。だが、一さん(五巴)の裏には自立し、身の苦しい体験がある。

四年前に故郷の福岡で商売に失敗。人に裏切られ、

感じ「利用者の個性を大切にしたい」と二〇〇三年、自ら認知症対応のデイサービスを始めた。

通所者は一日十人余。そろって体操するような決まった日課はない。利用者はゆったり食事や入浴をしたり、家庭のリビング風の部屋でおしゃべりするなど思い思いに過ごす。職員はそれに寄り添うよう努める。

通所者の半数以上に認知症の症状がある。職員が徘徊に一時間近く付き添うこともある。統括リーダーの武内えり子さん(三八)は「意味なく歩き回るように見えても、故郷の家に帰るとか、その人なりの目的がある。それを理解し、本人に納得してもらうよう心掛けて」と語る。

「そこから見えてきたのが野宿生活者の経済的な苦しさに加え人間関係の喪失。相談する人がいないばかりに少額の借金でも野宿になってしまふ」と豊田さん。親族と音信不通の人も多い。

昨年三月始めた火曜の会の目的は人間関係をつくること。「話すこと、聞くことを身につけて、周囲との信頼関係の中で自分の存在意義を感じてほしい」と豊田さんは願う。

「すると人間が変わり、生活を変えたいと前向きな気持ちになる。それを待っているんです」

支える

2

支える会は生活保護の



「岡山・野宿生活者を支える会」の「火曜の会」は近況報告後、ともに食卓を囲む食事会になる

「待つことは認知症ケアでも大切ですね」と言うのは介護事業所・まごのて村(瀬戸内市邑久町箕輪)社長の中川浩彰さん(三三)。以前は五十人も高齢者が通っていたが、画一的ケアに疑問を

「待つことは認知症ケアでも大切ですね」と言うのは介護事業所・まごのて村(瀬戸内市邑久町箕輪)社長の中川浩彰さん(三三)。以前は五十人も高齢者が通っていたが、画一的ケアに疑問を

「待つことは認知症ケアでも大切ですね」と言うのは介護事業所・まごのて村(瀬戸内市邑久町箕輪)社長の中川浩彰さん(三三)。以前は五十人も高齢者が通っていたが、画一的ケアに疑問を